

戦争と平和を語り継いでいく者として

第一部「小学3年生での、日常的な平和学習の積み重ね」

- 1 はじめに
- 2 日常的な平和学習の積み重ね（1）～（22）
- 3 おわりに

第二部「語り継いでいく者として」

- 1 はじめに
- 2 自分のことを話すことしか
- 3 平和集会「平和について考えよう～ぼくが学んできたこと」
（スライド52枚の内容）
- 4 おわりに～平和集会をおえて

三重県教職員組合

森嶋 克幸（もりしま かつゆき）

伊勢市立進修小学校

今次教研で論じられた内容と今後の課題

今次教研では、沖縄大学の吉井美知子さんと尾鷲小学校の谷良純さんを助言者に迎えて、以下のようにそれぞれの報告書を中心に柱にそって討議を深めた。

(1) 地域教材や聞き取りをいかした平和学習

白鳥中学校の浅尾さんからは、自分自身のライフワークとして、鈴鹿での戦争について、地域と戦争の深いかわりを掘り起こし、遺していくとりのくみが報告された。軍関連施設が市面積の10%をしめる、戦時中にできた鈴鹿市で、戦争をトータルでとらえることと、鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する会での格納庫保存運動にとりのくみ、署名活動をおこない、保存の働きかけをおこなった報告があった。授業実践から始まり、市民運動へとつなげた活動報告であった。進修小学校の森嶋さんからは、小学校3年担任として日常的な教育活動のなかで、機会を見つけて学級通信や学級文庫を活用して考える平和学習をおこなってきた実践が報告された。伊勢神宮内宮のそばで育った子どもたちと校区探検で戦争慰霊碑を見学し、伊勢名物の工場見学時に伊勢の空襲について聞き取りをおこなった。報告では、ご自身が戦争を語り継いでいく者として、他校で平和集会の講師を依頼されたときに、本で読んだことでなく、自分のことや体験を話すことにこだわったとりのくみもあわせて報告された。斎宮小学校の西村さんからは、活用していける身近なことから平和について学び、考えるとりのくみが報告された。町立図書館司書による平和をテーマにしたブックトーク、修学旅行での立命館大学国際平和ミュージアムでの学び、子どもの祖母の戦争体験が新聞掲載されたことから、祖父母への戦争体験ききとりにつながっていったこと、保護者の英会話講師の元国連カメラマンを紹介してもらったことから、毎年聞き取りをおこなっている実践が報告された。3つの報告を元に、子どもたちが今の日本を平和ととらえているのかということ、戦争にかかわる地域教材の掘り起こしと、戦争体験者の聞き取りから戦争を「語り継ぐ」ということについて討議を深めた。

(2) 学校行事や授業を通した平和学習

修学旅行を機会におこなった平和学習がたくさん報告された。沖縄修学旅行にかかわる報告が3本、広島修学旅行に関わる報告が1本あった。木曾岬中学校の新江さんからは、戦争体験者が高齢化し、直接お話を聞ける機会が減少し、「今、聞かなくては」という思いから修学旅行先を沖縄に変更し、とりのくんだ様子が報告された。沖縄では、戦争体験者のお話を聞くことに加えて、「カルチャーティーチング」での、ホームステイ（朝から夕方まで）先の米兵家族や、宿泊先のホテルの従業員などから、今の思いや基地の存在への思いをインタビューした活動や、修学旅行後に保護者や地域の方を招いての平和学習発表会のことが報告された。東員第二中学校の富永さんからは、沖縄修学旅行にむけての学習のなかで、基地が必要かどうかを議論したことや、修学旅行でガマに行き、ガイドさんから話を聞いたことから考えたことなどを、「戦争をしてはいけない」ということだけに終わらせないとりのくみが報告された。学級通信で、平和学習でその都度考えたことや、そこで培った思いで、自分やクラスを見つめたことなどを発信していった。亀山中学校の山田さんからは、沖縄修学旅行で、沖縄の今日的課題を考え、自分やなかまの課題も考えるとりのくみが報告された。「白旗の少女」の写真を見て、何をしていると

ころか考えることや、「生命を助けるビラ」を見て、本当に助けてもらえるのか、「基地はなぜ日本にあるのか」などを、いろんな角度から子どもたちと一しょに考えていったことや、修学旅行では、クラスごとに3カ所に分かれて訪れたガマでの聞き取りと体験、平和セレモニーで平和宣言を読み、そこで歌った「島唄」に平和への祈りを込めていったことが報告された。塩浜中学校の坂口さんからは、広島修学旅行の様子が報告された。子どもたちは、被爆体験者からの聞き取りをおこない、修学旅行先で出会った外国人に英語で原爆についてや原爆ドームについての思いや考えをインタビューした。現存する被爆ピアノを借りて、そのピアノで合唱するセレモニーや、平和の灯を分火してもらい、その灯のもとで、その夜に平和セレモニーをおこなった。修学旅行中にちょうど原爆死没者名簿の風通しがおこなわれていて、そこにも立ち会った様子も報告された。南島中学校の越賀さんからは、郡内の教員がとりくんできた平和教育がまとめて報告された。近所の元特攻隊員からの聞き取りの様子、戦争に関するさまざまな日を子どもたちに提示し、何の日か知っているかからはじめ、できごとを確認していったこと、新聞記事から考えていった平和学習が報告された。また、ニュース23で放映された原爆投下された直後の広島での出産の話「うましめんかな」や、福島での原発災害被災地フィールドワークに参加して考えた「フクシマ」差別や「双葉」差別などの実態も報告された。これらの5本の報告のあと、主に基地問題について討議された。また、メディアリテラシーの視点からめて、新聞記事などをどのように活用するかも議論された。

成果と今後の課題

討議では、地域に根ざしたことから考える平和教育、修学旅行などで訪れた場所に関わる事実から考える平和教育のどちらのとりくみにおいても、知識だけで終わらせず、「知った責任」をどのように果たし、今後にかすか、自分たちの生活する地域で、どのように平和教育をかすかについてたくさん話しあわれた。戦争体験者が高齢化していくなかで、語り継いでいくことの大切さも話しあわれた。それらは、大切なことであるが、それを実のあるものにできているかの課題が出された。知ることだけに終わらせず、教員、子ども、親、地域の方と一しょに、「知った責任」をみんなで連携しながら「語り継いでいく」こと、その体制づくり、方法づくりをさまざまな実践から、地域に根ざした形ですすめていくことが話しあわれた。

第64次県教研 司会者 橋本 浩信

第一部「小学3年生での、日常的な平和学習の積み重ね」

1 はじめに

高学年での実践は何年もやってきたが、およそ20年ぶりの3年生とどこまでできるだろうと、年度当初に思案していた。と同時に、今こそ平和教育を実践しなければいけないという意志に揺らぎはなかった。学校行事や学校全体のとりくみ、年間的なとりくみは、子どもを成長させる。そこで今年は日常的な平和学習を積み重ねていこう、夏までに戦争に関わる話をしてもらえる地元の人に話をしてもらおうと考えた。

子どもの様子としては、きちんと自分の気持ちを伝えることがむずかしい子どもがいる。ことばにできにくい子どもの思いをとらえようとするのを大事にしながら、自ら興味関心を広げ調べる力、相手ときちんと話しあえる力を、育んでいきたいと考えていた。話しあう力は「平和をつくる力」である。

2 日常的な平和学習の積み重ね

(1) 教室環境整備『はだしのゲン』(4月上旬)

「3年生にはむずかしいかな。置くだけ置いてみよう。」と思って置いたが、これはおとなの勝手な判断だった。子どもたちはどんどん手にとって読みすすめていく。「○巻、誰が持っている？」と聞く子どももいる。秋を過ぎても学級文庫に全10巻がそろっていることはない。原爆の話をするとき、「はだしのゲンの1巻の最後に出てくる爆弾」と言えばつうじるので、話がしやすかった。

(2) 国語「日記指導の導入」(4月上旬)

わたしが小学生のときの日記帳と作文を紹介した。小学2年生のときをふりかえったものを選んだ。わたしが記憶している人生最初の家族旅行の思い出「広島」である。原子爆弾、『はだしのゲン』とつなげた。また1発の原子爆弾で、伊勢市の赤ちゃんからお年寄りまで全滅する以上の人がなくなったことを話した。想像できない様子の子どもの表情だった。

(3) 社会「地図記号」(4月下旬)

「消防署」は記号の由来が、わかりにくい。そこで、「昔、消防車がない時代に、火事が起こるとどうしていたと思う？」と聞いてみた。そうしたら「井戸の水をバケツリレーでかけた」という意見が何人もから出された。そこでわたしから、「昔の、男の人がちょんまげをしていた時代は、火事になると、周りの建物を壊して火を広げないようにしたこと」、「戦争時代は、敵の飛行機から建物を燃やす用の焼夷弾という爆弾のようなものを落とされることが、日本中であつた。そこで、建物疎開といって、わざと建物を壊して、燃えた家から火が広がらないようにしたこと、人が逃げる道をつくったこと」を話し、その建物を壊すためにこの記号のような道具を使ったことを話した。

子どもたちは、火事を広げないために家を壊したことに驚いていた。地図記号を通して、戦時中の事実を一つ知った子どもたちである。

(4) 学級通信「憲法記念日の前に」(5月1日)

3年生にどのように書けば伝わるかを留意しながら作成した。配ったときに読みあげた。
~~~~~

どうして、5月3日がお休みなのかを、できるだけわかるように話します。

みなさんのおじいさん、おばあさんが生まれる少し前に、日本は「せんそう」という、国と国のけんかをしていました。国と国のけんかは、ものすごくこわいです。ころしあいだからで

す。日本の人もまわりの国の人も、たくさんしんでしまいました。ものすごくたくさんの方がかなしみました。だから、せんそうがおわったあと、「日本は、せんそうを、もう二度としない。」ということを書きました。これを、「日本国けんぼう」というやくそくの本に書いて、まもってきました。だから、それから日本はせんそうでだれ一人もしなせていません。

このやくそくを「みんなでまもりましょう」ときめた日が、67年前の5月3日なのです。だから、5月3日を「けんぼうきねん日」として、とくべつにお休みにしているのです。

~~~~~  
Aが「テレビで『戦争をしない国』から『戦争ができる国』になると言うのとつばやいた。この声から、「そういう意見もある。戦争になったら、殺しあいに行くのはあなたたちだから、テレビを見たりしてちょっとずつ勉強していったな。新聞もまだ漢字がむずかしくて読めへんと思うけど、3年生で漢字を勉強していくと少しずつ読めるようになるでな。」と話した。

(5) 子どもの発言「さいやく」(5月上旬)

雨天のため、体育を体育館ですることにした。50m走を走るのを楽しみにしていた子どもが「さいやく」と言った。この発言をきっかけに次のような話をした。

~~~~~  
「さいやく」と言うのは、本当は「さいあく」で漢字で「最悪」と書く。これ「一番悪い」という意味で、例えば、「親が死んでしまう。」「地震や津波で家がなくなってしまう。」「原発で突然家から追い出され、帰られへん。」「戦争で殺しあう。」こういうのは「最悪」と言ってもいいやろ？ だけど、体育が運動場から体育館にかわるのは最悪でないやろ。最悪とちがって「残念」や。僕は最悪ということばはめったに使いたくない。最悪なことがないようにしたいんさ。

~~~~~  
子どもたちはとても納得していた。以後、「さいやく」と聞かなくなった。

(6) 社会「校区探検」(5月中旬)

慰霊碑の見学をした。「日清 日露之戦役戦死者」9人、「満州事変 支那事変 大東亜戦争の戦役戦死者」112人の名前が彫られている。人数だけで規模のちがいがわかる。「70年ぐらい前の戦争でなくなった人の名前が載っている。みんなのひいおじいちゃんの名前が載っているかも。」と言うと、慰霊碑の名前を読もうとする子どもたち。自分と同じ名字がないことで、「自分と関係ないわ。」という感じで関心から離れようとする子どもが何人もいた。そこで、「4家族に一人は亡くなった。みんなのひいおじいちゃんがその一人なら、みんなは生まれていなかったかも。」と言うと、「え〜。」と自分とのつながりに驚く子どもたちであった。

(7) 理科「たねをまこう」(5月中旬)

テスト直しのときのこと。「1つのたねから、1つのめができました。○か×か。」で、「人間はときどき双子、三つ子とかで生まれてくるけれど、花はここでは○」と話をしたとき、Aが「体が一つで頭が二つのコブラが生まれたというのをテレビで見たことがある。」と言い出した。そこで、ベトナム戦争の枯れ葉剤の影響を受けたベトちゃん・ドクちゃんの話「戦争は殺しあい。戦争で使った毒がお母さんの体に入って、体がくっついて生まれた。日本が協力して、体を分けたが、一人(ベト)は数年前(2007年)に亡くなった。もう一人(ドク)は生きている。」という話をした。「戦争って、こわいな。」と言う子どものつばやきが聞こえた。

(8) 学級文庫『せんそう 1945年3月10日東京大空襲のこと』東京書籍(5月下旬)

この本は、東京大空襲で母親を亡くした塚本千恵子さんが文を書き、その息子の塚本やすし

さんが絵を描いた絵本である。学級の子どもが学級文庫の新刊の希望を出している。この本はAが希望したものである。その絵本が学級に届いたときのこと。

~~~~~  
総合学習「めざせ！伊勢名物はかせ」の学習をはじめするために、地域の伊勢名物のお店に出掛け、聞きとりや工場見学をさせていただけるかをお願いしていたときのこと。あるお店の社長さん（85才ぐらいの女性）と話をしていた。話の内容が、子どもの未来についての話になったとき、その方は、次のような話をしてきた。「わたしな、東京大空襲にむかうB29を、見とんのさ。東京から疎開しとったんやけど、B29から放物線上に赤く光った焼夷弾が落とされるのを見とったんさ。神宮外苑でおこなわれた学徒出陣あったやろ、あのスタンドにおったんさ。ああ、学生さんたち、帰ってこれへんのやろなあ、と思いながら見とったんさ。今の政治を見とると、この二つの場面がどうしてもつながって、うかんでくるんさ。」と。

わたしにとっては歴史の1ページである出来事を体験されていた方が目の前にいることにびっくりしたが、今はそういう時代なのだと、あらためて思った。

~~~~~  
ちょうど上記の話を聞いたばかりだったので、「校区のお店の社長さんが、この東京大空襲に行くアメリカの飛行機を見たって言うんさ。」「空襲って、わかる？」「飛行機から爆弾や焼夷弾というものを落として、人を殺したり、家を燃やしたりする。」「一晩で10万人ぐらいが亡くなった。今の伊勢市が全員で13万人ぐらいだから、13人に10人は亡くなったぐらいの数。」子どもたちはことばが出ずに黙って聞いていた。「そのおばあちゃん、住んでいた東京から少し離れたところに逃げていたので大丈夫やったんさ。今度、会って話を聞けるといいね。」と話した。そして、このお話をさせていただくお願いをしようと心に決めた。

この絵本は、もちろんAから読みはじめ、学級文庫で何人かが読んでいます。

(9) 国語「新出漢字：『横』の学習」（5月下旬）

「横書き」で教科書に出てきた。それに絡めて、「今は縦書きは国語のときだけで、理科も社会も横書きになった。アメリカの国語の英語は、横書き。日本は戦争でアメリカに負けたので、アメリカの影響が大きい。でも、日本は日本語が今もある。外国では、戦争で負けて家来の国になって、何百年も続くと、自分の国のことばがなくなった国がある。例えば、ブラジルという国。何百年もポルトガルという国の家来になっていたので、自分たちのことば（国語）がポルトガル語になっている。」と話した。

子どもたちは（こんなこともあるんだあ。）という表情で聞いていた。

(10) 「朝の会」（6月中旬）

毎日の「朝の会」で、朝日新聞の「しつもん！ドラえもん」からクイズを出している。いろんなことに興味関心をもってほしい。子どもたちは楽しみにしている。

サッカーワールドカップが開催されていたので、「2カ国共催でワールドカップをした国は？」というクイズを選んだ。わたしが「ヒント：みんながよく知っている国」と言うと、「アメリカと、〇〇（ヨーロッパの国）」という意見が数人からあがった。一人が「日本と中国」と言っていた。事実は「日本と韓国という隣の国」。続けて黒板に周辺地図を書きながら…。「昔、日本は韓国を家来の国にしていた。そのときに、韓国の人たちにつらい思いをさせたんさ。『12年前のワールドカップで、昔いろいろあったけれど、これから仲良くしよう。』というので、いっしょに大会をした。ワールドカップって他のスポーツでもやっとなるんやけど、サッカーだ

けなんでこんなにもりあがっるとかという、地球上で一番している人が多いスポーツがサッカーらしい。だから多くの国で注目されるんさ。で、仲良くできたんやけど、今また仲がよいとは言えない。」と説明した。日本の戦時中の加害のこと、そして安倍首相の靖国参拝のことが、わたしのなかではあったが、「昔、むりやり連れてこられた韓国の人たちやその子どもたちがたくさん日本で生活しているので、どこかで会うかもしれないな。仲良くしような。」とつけ足して、これ以上は話さなかった。

子どもたちは（自分が生まれる前にそんなことがあったのか）という表情をしていた。

(11) 朝日新聞「沖縄慰霊の日に」(6月23日)

毎朝の「しつもん！ドラえもん」のクイズのかわりに、先生クイズとして出した。「今日、日本のどこかの県の学校はお休みです。さて、どこでしょうか？」というクイズ。子どもたちは自分の知っている県名を挙げた。「正解は、沖縄県」と言って、プリント(2014年6月23日：朝日新聞朝刊「いちからわかる！」欄)を配布して説明しながら読んだ。高学年を担当すると、毎年6月には「さとうきび畑の唄」を見せているがまだ見せていない。「沖縄では空襲だけではないことが戦争中にあったんだ」ということは伝わったと思う。

(12) 給食の時間の話から。「広島平和祈念式典」(6月下旬)

子どもたちが嵐の話をしていて、そのなかでBが嵐の桜井さんのファンだという話が出た。Bとはあまり授業以外の話をしていなかった。そこで、2年前の夏にかなり近い距離で桜井さんを見たこと、生写真を撮ったこと、今度持ってくることを話した。Bは目を輝かせて聞いていた。翌日に早速、写真を子どもたちに見せながら、次の話をした。

~~~~~

69年前の夏、8月6日に広島に原子爆弾が落とされた。これは、『はだしのゲン』に載っている。たくさんの方が1発の原子爆弾で亡くなった。原子爆弾は8月9日に長崎にも落とされた。そのあとの戦争では使われていない。日本は「持たない」と決めているけど、アメリカとロシア、中国とか持っている国もある。ヒロシマはこの日を忘れず、この日の人たちのことを思い、同じことを繰り返さないために、毎年8月6日にみんなが集まって集会みたいなものを行っている。僕は前に教育委員会にいたけど、そのときに伊勢市の中学生代表の24人と一緒にヒロシマのその集会に行った。そのときに嵐の桜井君はニュース番組をしているから、それで取材で来たんだと思う。ここから廊下ぐらいの距離やった。みんなも中学生になったら行けるで、立候補したらいいよ。原爆を体験してしまった人からお話を聞いたり、平和記念資料館を見学したり、千羽鶴を届けたりするんさ。ひょっとしたら、桜井君と会えるかもしれんよ。

~~~~~

そして写真はプレゼントした。この子どもたちが中学生になったとき、中学校の教員からヒロシマの話を聞いたとき、このときのことを思い出してくれるだろう。また、夏休みの空襲展に行ったときに、毎年行っている参加中学生による報告会を聞いたときも思い出してくれるだろう。少しでもヒロシマを身近に感じてほしい。自分のなかに入れてほしい。

(13) 総合学習「伊勢名物工場見学」(6月下旬)

(8) で記述した社長さんに、工場見学をさせていただいた。そのなかで、空襲で前の店が焼けて今の場所にひっこしてきたことを言われた。このことは、何人かの子どもの感想にも書かれた。空襲が過去に身近にあって、それと今がつながっていることを感じていってほしい。

(14) 「帰りの会」(7/1) 「朝の会」(7/2)

集団的自衛権容認が閣議決定されるだろう日の「帰りの会」に少しだけ話をした。「戦争で負けてから69年間、外国が攻めてきたら守るが日本は戦争しに行かない、ということで、戦争で誰一人殺していない。だけど、それがかわるといいうニュースを今日するかもしれない。日本がもし戦争になったら、戦場に行くのは僕みたいなおじさんじゃなくて若いあなたたちやで、少しでいいからニュースを見るといいよ。」と。「戦争したくない」「戦争反対!」という声が5人ぐらいから聞こえた。

翌日の朝、ニュースを見た人を聞いた。半数が挙手した。「何か思ったことある?」と聞いたら、3人ぐらいから「よくわからんだ。」と。Cが「お母さんに、(戦争になったら自分は)戦争にいかないかんかもしれん?と聞いたら、『かもしれん』と言われた」と。D(女子)が「女の子も戦争に行かないかんの?」と聞いてきたので、「70年ぐらい前の戦争のときは男だけやったけど、今のアメリカは女の人も行っているから、行かないかんかもしれんなあ。」と答えた。

政治によって自分の人生が大きくかわる今の状況。少しずつ関心を高めていってほしい。

(15) 児童集会「スター(七夕)集会」

一人一枚願い事を書いて、体育館にかざる。3年生一人ひとりの願い事は、学級通信に載せて保護者にも伝えた。3年生ではEが「日本がへいわになりますように」と願っていた。わたしも願い事を書いた。「世界平和を求めます。」と。

各学年から代表2人が前に出て、自分の願い事を発表する。昨年度担任した6年生2人が「世界が平和になりますように」「世界中のみんなが幸せにくらせますように」と発表し、下級生全体から「うお～」と感心する声もれた。わたしも嬉しく思った。

(16) アニメビデオ「火垂るの墓」の鑑賞(7月上旬)

この頃には前述の社長さんから、戦中・戦後のお話を子どもたちにしていただく約束ができていたので、「火垂るの墓」を見せたいと考えていた。ただ、辛すぎる話なので小3の子どもたちにどうかと少し迷いがあった。しかし、子どもたちから「見てみたい。」「見たい、見たい。」と声があがった。Fが「泣ける?」と聞いてきたので、わたしは「泣くために見るんじゃないよ。戦争のとき、こんなことがあったんや、と知って考えるために見るんやよ。」と答えた。

「子どもたちは静かに見て感想を書いていた」と教頭から聞いた。子どもたちの感想は、通信にまとめた。これを見せることができ、空襲の様子、焼夷弾、防空壕など、ことばでは伝えられないことがわかって、今後の社長さんからの話も分かりやすくなった。

(17) 「二分間日記」(7月上旬)

年度はじめからつづけている日記に、ある日、Gが以下を書いてきて、返事を書いた。

~~~~~  
「一番の英語」(G)

このまえ、オーストラリアから来た、エリー(仮名)とグーパー(仮名)と遊びました。1日目は〇〇の店で、お好み焼きを食べました。2日目は、〇〇の湯とカラオケと、お寿司屋さんに行きました。ほんとは、3日間とまるはずだったけど、台風が来るから、早く帰りました。ちょっとかなしかったです。

(返事) これは残念だったね。だけど、エリーとグーパーはきっと日本をすきになったんだと思うよ。それが平和。

~~~~~  
国際的な相互理解が平和につながる。それも民間の一人ひとりのつながりが大事と考える。

(18) 総合学習「地域の人々の戦争体験を聞こう」(7月中旬)

社長さんからの聞きとり。そのときに初めて会った人でなく、その前に地域学習で出会った人の体験を聞くということが大切。「この人はこの前にこんな話をしてくれたけれど、こんな体験をしているのか。」と、身近に感じることができる。もちろん、社長さんとは事前に打ちあわせをした。子どもたちの様子を伝え、それを考慮して最後のメッセージを考えていただいた。

前日に、事前学習をした。まず、先日の「火垂るの墓」の感想通信を読んだ。次に、(8)の絵本『せんそう』の読み聞かせをした。ただし、Aが「読みたい。」と言ったので、読んでもらった。その結果、自分たちで学習をする雰囲気をつくれた。また絵をプロジェクターで投影し、それを見ながらAの音読を聞いた。わたしは、「疎開」「灯火管制」「防空壕」「焼夷弾」等の説明をした。この後、感想交流をした。

- ・戦争は国どうしのけんか。原因は、どこかの国が、どこかの国に、何かをしたから。
- ・戦争はいやだなと思いました。
- ・戦争で、いろいろな武器を使って戦争するって知らなかった。
- ・なんで国と国同士で戦争をするのだろうと思いました。
- ・日本がアメリカと戦争したなんて、知りませんでした。
- ・飛行機が家を壊したり、人を殺すわけを知りたいです。
- ・お母さんを亡くしたのが、かわいそう。

当日、対談形式でわたしが補足説明を加えながら話をしていた。特に気持ちが残っている「学徒出陣」の話をされたときには、「話をしていると、涙が出てくる。」と言われた。戦中・戦後の生活(特に食べ物)がよく伝わったようだった。質問コーナーでは、Cが「戦争とけんかはどちらがうのですか?」と質問した。社長さんは「戦争は殺しあい。」と答えられた。わたしが「それも、早い者勝ち。早い殺しあい勝ち、やな。自分が殺される前に相手を殺さないと生きていけない。こわいな。」とつけ足した。つづいてHが「戦争の理由は何ですか?」と聞いた。社長さんは「いつのまにか、戦争になっていたのよ。今でもわたしはわからないんです。教科書とかでは、土地やもの(資源)の取りあい、って書いてあるようですよ。」と言われた。わたしが「いつの間にかおこつとる、というのもこわいなあ。」と続けた。最後に「ケンカをしたくなったら、よく話しあってください。話し合いが大事。戦争は絶対ダメです。」と話してくれた。これは、子どもの実態にあわせた、今後の子どもたちの生活に直接つながることで、とてもよかった。この授業は通信に書いて、保護者への啓発もねらった。Iの感想を紹介する。
~~~~~

せんそうは、いやだなと思いました。なぜなら、せんそうは、人の命をうばうケンカだからです。わたしは社長さんの話を聞いてよかったなと思います。なぜなら、もしわたしが大人になったときに、せんそうがあつたら、どんなことがあるかわかるからです。わたしは、もっとせんそうのことを知りたいです。わたしは、せんそうは、はんたいです。ごはんがなくなるし、かんけいのない人まで命をうしなってしまうし、おとうさんやおかあさん、おにいちゃんがしぬのがいやだし、人の命をうばう人はゆるせません。命やかぞくは、うしなったらとりもどせないたいせつなことからものだからです。せんそうみたいな大ごとじゃなくてじゃんけんで決めたらいいと思います。じゃんけんを生み出した人は、すごいと思います。わたしは、せんそうは、だいきらいです。もういっしょうせんそうはしてほしくないです。どこの国も、せんそうをしないちきゅうであってほしいです。

~~~~~  
また、日記にJが次のように書いていた。

~~~~~  
いやなせんそう (J)

3, 4限目に、社長さんがお話をしてくれました。せんそうについての話をしてくれました。せんそうを社長さんが自分の目で見たと言っていたので、びっくりしました。

~~~~~  
あらためて、出会い学習の強さを感じる。実際に体験した方のお話には「言霊」(ことだま)がある。これは第二部と関係する。

(19) 夏休み前日に

夏休みには、普段以上に戦争と平和についての情報が子どもの目に入りやすい。これを素通りせず、少しでも立ち止まって自分のなかに入れてほしい。引っかかって、自分の思考で考えてほしい。そのために二つの紹介をした。

一つめは、朝日新聞の「教育特集」の「原爆知る」を配布した。「はだしのゲン」の作者の中沢啓治さんの生前のインタビューを読み聞かせた。「こういう気持ちで、ゲンを書いたんやな。」と。「はだしのゲン」は、「表現が残酷すぎる」ということで撤去された学校があつて一時期は話題になったが、中沢さんは「絵は現実よりかなり弱めに描きました。」「それでも残酷すぎると言われました。」と言っている。もう一つ、「たずねる広島」「たずねる長崎」と題して原爆資料館など見学場所の紹介をしている紙面を広げさせて、「広島ここが、僕が4月はじめに、日記で書いた場所です。覚えてる？」と聞くと、半数ぐらいがうなづいた。わたしが「夏休みにどこに行きたい？と親から聞かれたら、広島とか言うのと、連れていってもらえるかもしれんよ。」と話した。Lが「親に話したら、もう少し大きくなってからな、と言われた」と言ってきた。わたしは「それもよくわかって、いいかもしれんな。」と伝えた。

二つめは、(18)についての通信をわたしが読みあげた後、毎年8月に市内で開催される「空襲展」のチラシを子どもたちに配布し、読みあげた。ただ配るだけでなく、立ち止まって少しでも子どもの心にのこさせようとするのが大切だ。「空襲展」の展示の中心は、地元の空襲の様子なので、より身近に感じることができる。チラシの写真に伊勢空襲後の伊勢市駅周辺の写真が載っていた。社会科の学習で、バスで市内をまわっていたので、「度会橋から伊勢市駅までの広い道があったやろ？ あの道が昔はこんな様子やったんさ。」と話せた。

(20) ヘリコプターの音から沖縄を思う(10月下旬)

沖縄県知事選が公示された頃、ヘリコプターの音で授業が妨げられた。このとき、「沖縄には学校のすぐそばにアメリカの基地があつて、毎日この音をもっと大きく鳴っているところがある。勉強もでけへんし、事故や事件の心配をしている人たちがたくさんいる」と話した。今の沖縄に関心をもってほしい。

(21) 子どもの成長～国語「ちいちゃんのかげおくり」からの発展学習いろいろ(10月)

登校指導ボランティアさんが戦争体験を話しにきてくれた。全員の子どもたちが知っている方なので、とてもよかった。「お父さんが戦死した。」「伊勢空襲の時は川の橋の下に逃げた。」など、教材と重なる部分も多かった。さらに、本文の「お父さんは、～日の丸のはたにおくられて～」という部分から、国旗「日の丸」を反対している人がいることを話し、その人たちの気持ちを訊ねた。「悲しい思い出がある。」「また戦争にならないかと不安になる。」と意見が出

た。「戦争の関係だから、日の丸はいや」とつぶやく子どももいた。ビデオ「少年H」の鑑賞もし、後日にこれらの発展として、文化祭の学級発表で、「ちいちゃんのかげおくり」を音楽劇をした。大変意欲的にとりくむ姿が見られ、子どもたちの成長を感じた。保護者や地域に発信でき、子どもたちの自信にもつながった。最後に、『少年H（上・下）』（妹尾河童）・『おはじきの木』（あまんきみこ）を紹介した。どんどん読みすすめる子どもたちの姿が見られた。

（22）まど・みちおさん『こどもたちへ』（11月中旬予定）

今年の2月末に亡くなられた、まど・みちおさんの『こどもたちへ』（講談社）という絵本の読み聞かせをしたい。まどさんのことは「ぞうさん」「一ねんせいになったら」「ふしぎなポケット」などを紹介したら、子どもたちはみんな知っている。

文中に「たべものがなくて しにそうな人は かぞえきれないほど います。」「あっち こっちに せんそうも たえません。」があり、最後に「ぜんりょく あげて がんばって ぜんりょく あげて たのしんでください。」と締める。やさしい文章で、大事なことを伝え、子どもをあたたく応援している。伝えたい。

3 おわりに

4月からの実践をふりかえってみて、「3年生でもこれだけ平和学習ができるんだ」と思った。子どもたちの成長も見られた。積み重ねで知識は増えたとし、興味関心も高まった。ただ、「戦争の話はいつもかなしい話でイヤ。聞きたくない。」と、戦争を拒否するのはよいが平和学習を拒否する人にならないように留意したい。

一つは、過去の話ではないように子どもに感じさせること。まさに今、戦前と言ってよい方向にある。それでも今の「平和」につなげることが大事なのだろう。そして、自分の生活とつなげること。今の自分の生活は過去にこういうことがあったから今がある、そして、平和が遠のいたとき、今の生活がどう変わるのかを思うことができるようにすること。

もう一つはこの実践での弱点である。それは「3年生での、日常的な平和教育の積み重ね」報告であることである。「3年生との」もしくは「3年生の」と書けるとりくみをしたかった。「子どもたちから」の自主的な平和学習を成立させたいと思う。

今後わたし自身も学習しながらとりくみを重ねていきたい。子どもによりよい未来をバトンタッチできるよう、また子どもの未来を保障できるよう、大人としての責任を負いながら（その一つが戦争と平和を語り継いでいくことにある）、子どもたちとともに平和を求めていく。

第二部「語り継いでいく者として」

1 はじめに

夏休み直前に市内小学校の先生から、「平和について、集会で話してほしい。」という電話があった。わたしはびっくりして「戦争を経験していない僕よりも、経験されている人の方がいいのではないですか？」と言ったら、「これまでに経験されてきた人に話をしてもらってきて、今年は少し変えてみようと考えて。」と答えられた。私は「近い将来、必ず戦争を経験した人はいなくなるから今からしっかり準備しておくといいし、普段より時間があるから何とかできるだろう。」と考え、させてもらうことにした。

2 自分のことを話すことしか

しかし、そこからしばらく「どうしよう？ 1～6年生まで370人ぐらいに分かる話ができるか？ 担当は僕に何をねらっているのだろうか？」と途方に暮れていた。そのなかで、「やっ

ぱり、自分のこと・体験を話すしかない。どこかの本からもってきたような話では、子どもの心に届かない。」と思った。これは、第一部の2（18）の社長さんの話を聞いた子どもの反応がよかったからだ。社長さんとの出会い学習の後、学校長と「自分で体験してきた人の話は強い。」「言霊というのが、やっぱりあるんだよなあ。」という話をしていたからだ。

悩んでいるなかで「自分が教えてもらってきたことを伝えよう。」「自分のことを話して、1～6年生まで全員にわかってもらえる話にはできない。話のなかで一つ伝わればいいんだ。それは人によって違っていいんだ。」と開き直って、スライドをつくった。以下のことを留意した。

①自分のことを話そう。②自分が本などで学んだことはやめよう。人から聞いたことは語り継いでいかなくは消えてしまうので、大事にしよう。③ことばだけでは45分を聞いてもらえない。写真を組み入れよう。④聞くだけでなく、発言したり挙手したりする場面をつくろう。⑤戦争のことを伝えて終わるのでなく、平和をつくっていく話をしよう。

学校には、世界地図、日本地図、パソコン用のプロジェクターとともに書画カメラも用意していただき、ずっと同じ画面を見ているのではなく、視線に変化を入れた。

ほんとうはもっとクイズを入れたかった。「かわいいキャラクターが出てきて一言コメントを言ったりするのもいいかも。」「なにか実物を借りようか、でも370人には見せられないしな。」なども考えたが、当時の時点ではここまでだった。

3 平和集会「平和について考えよう～ぼくが学んできたこと」（スライド52枚の内容）

①夏休みにしたことは平和でないといけない②自己紹介（家族紹介、被災地ボランティア活動）③平和を続けてきた貴重な国：日本④戦争を教えてもらった12人の体験と共通のことば「戦争は何があっても絶対にしてはいけない」⑤戦争って？→国と国の殺しあいのけんか⑥平和って？→今の普通の生活を、普通に続けられること⑦平和をつづけるためには、平和を大切にすることを学ぶこと⑧平和に生きるために～悲しみをへらすために僕がしていること（募金、ボランティア活動、献血）⑨あなたができることは学ぶこと（高齢者から聞く、慰霊碑を調べる、現地に行く）⑩今できること（共感、挨拶、悲しみを大切に）⑪一つ決めてやってみよう

4 おわりに～平和集会をおえて

子どもたちは予想以上にしっかり聞いてくれた。しかし、低学年はがまんして座っている様子が見られた。やってみて以下を思った。今後のために検討していきたい。

①戦争体験者のスライドを厳選してもよかったかも。②戦争体験者の写真だけでなく、ビデオで動きや音声があるともっと伝わる。（そのビデオに聞き取りをしている報告者自身が入っているともっとよい。）③戦争に関する「物」でなく、「人」に注目させたことはよかった。④防空ずきんや国民服などを着て、「戦争を伝える」の方に重点を置いた方がよかったのか？⑤難しいことばは、できるだけ低学年にわかりやすいことばで説明したがどこまで伝わったか？（特攻隊、縁故疎開、学徒出陣など）⑥戦争体験者の体験やことばを伝えたが、加えてわたしの感想を言った方がよかったか？

後日、子どもの感想を教えてもらった。一番多かったのは、わたしの一生懸命さが伝わったということだった。次に、「ネコやヘビを食べた」「妹が撃ち殺された」などの紹介した戦中の体験に驚いたこと、そんな時代があったことだったそう。

初めてのことで改良していく点がいくつもあるが、語り継いでいく者としての役割を果たせるよう、これからもつとめていきたい。集会で子どもたちと会話をしながら、子どもの意見や体験を聞きとりながら「ともに考える」平和学習をめざしていきたい。